

## 「こえ」を読む

筑波大学附属中学校 三年 遠藤 港音

「おじいちゃん。」と呼びかけると、祖父はギョロツと目だけを動かして僕を見た。口を動かして何か言おうとしているが、かすれてほとんど聞きとることができない。僕は顔を近づけて「何？おじいちゃん。」と、もう一回聞いてみた。祖父は一生懸命に口を動かすのだが、やはり声にならず、わかってあげられない。そこで僕から話すことにした。担任の先生が代わったこと、テストのこと、部活の試合のこと、修学旅行に行ったこと、一方的に話したら、今度は話題につまってしまった。

祖父はパーキンソン病で、体が不自由だ。前は杖をつけて歩いていたのに、一度、肺炎になってから体力が落ちて、ベッドに寝たきりになってしまった。数ヶ月前まで自分でご飯を食べていたのに、今は血圧が下がってしまうので、リハビリもできない。

祖父は、もともと無口な人だ。将棋が好きで、僕が小学生の頃は、夏休みに遊びに行くと、必ず将棋の相手をしてくれた。本を読むのも好きだ。難しそうな本をたくさん持っていて、本棚からあふれて積み上がっている。「片づけないといけないな。」と言いながらも片づいてきれいになるどころか、本は増えていたように思う。おこづかいもたっぷりくれる。それで僕は、好きなお城の本や歴史の本をそろえたり、いろいろな図鑑を買ったりして、僕の家の本棚も、祖父に負けないくらいぎっしりと本が並んでいる。いろいろな物ももらった。昔の記念切手、昔のお札や記念硬貨、筑波万博で買ったパンフレットや葉書き、外国のお土産の置き物も。何でも「持って行っていいよ。」と僕にくれた。大切にとっておいてくれたことを、ありがたく思っている。

一日中、ベッドに寝ていて、退屈ではないだろうか。何よりも「こえ」を出せないと、自分の思いを伝えられず、困っているのではないだろうか。心配になって母に聞いてみると、体調の良い日は、よくしゃべることもできるそうだ。僕は少しほっとした。

ふと横の本棚を見ると、ぶ厚いノートが入っていた。ひっぱり出して見てみると、祖父の字で「新聞コラム」と表紙に書いてあった。中には新聞の記事の切り抜きが、

たくさん貼ってある。よくよく見ると、驚いたことに、コラムの最後に祖父の名前が入っていて、全部、祖父が書いた記事だとわかった。「わあ、すごい。これ読んでいい？」と、答えられない祖父の代わりに母に聞くと、「おじいちゃんなら、もちろんいいよって言うと思うよ。」と言ってくれた。

祖父は新聞記者で、このコラムは退職する前の五年間くらいの記事らしい。テーマは幅広く「人口減少」「憲法改正」「漁業強国」「食育」など、僕にも理解できそうなものもあるが、難しい内容も多い。白紙の出稿伝票もはさまっていて、タイトル、筆者、面数、段数、行数、掲載日など細かく記入するようになっていた。

僕は祖父に「借りるね。」と声をかけた。祖父は何も言わなかった。「また来るね。」と言って、母と帰ろうとした。すると背中越しに「がんばって。」と、かすれた、小さな声が聞こえた。あわてて祖父の所へ戻って「おじいちゃんもがんばってね。」と答えた。祖父は、静かにまばたきをして、僕を見送ってくれているように思えた。

このノートには、祖父の書いたたくさん文字がつまっている。言い換えれば、祖父の「こえ」がぎっしりつまっているということだ。実際の祖父の「こえ」を聞きとれることは少ないが、このノートから、僕は、昔の祖父の「こえ」を読むことができる。母も、祖父の記事を読んだことはなく、このノートの存在も知らなかったそう。僕はこれから、ゆっくりと時間をかけて、かつて祖父が伝えた「こえ」を読みたいと思う。